

平安神宮神苑の建築と大鳥居の修理工事について

主席研究員 藤本春樹／研究員 伊藤誠一郎

はじめに

平安神宮は京都市左京区岡崎に所在し、明治28年（1895）3月、平安遷都1100年祭を記念して創建された。平安神宮の御祭神は桓武天皇並びに孝明天皇で、桓武天皇は創建時に奉祀され、孝明天皇は昭和15年（1940）に合祀された。また、京都の三大祭の一つでもある時代祭は、毎年10月22日に執り行われている。

平安神宮では、桓武天皇1200年の大祭を平成17年（2005）に迎えるにあたり、さまざまな記念事業が計画された。そのうち文化遺産の修理保全事業として、神苑内の尚美館（貴賓館）と泰平閣（橋殿）の檜皮屋根葺替工事、大鳥居塗装並びに鍔金物鍍金工事、内拝殿と大極殿の基壇、高欄改修工事、龍尾壇高欄塗り替え工事等が行われており、今回は、尚美館と泰平閣の檜皮葺替工事、大鳥居の修理工事についての報告とする。

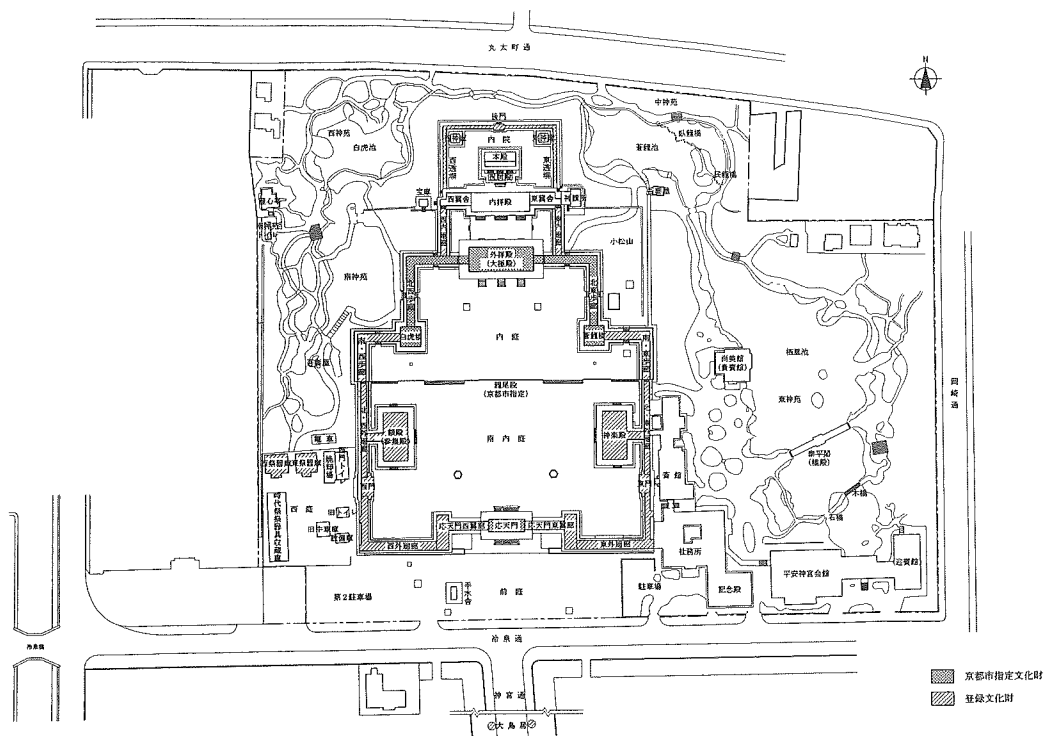


図-1 平安神宮境内配置図

1. 平安神宮の沿革

平安神宮の境内は、冷泉通りの北側に位置し、北は丸太町通り、東は岡崎通りに面している。敷地面積約7万平方メートルを有し、正面の応天門を入ると外拝殿（大極殿）、内拝殿、祝詞殿、本殿が南から北へ一直線に並び、応天門から外拝殿にかけては上下二段に白砂が敷かれ、上段に龍尾壇が設けられおり、外拝殿の正面には左近桜、右近橘が植えられている。外拝殿の南東には蒼龍楼、南西には白虎楼が建ち、それぞれ歩廊で外拝殿に繋がっている。また、応天門と両楼を繋ぐ廻廊が東西に廻らされ、東廻廊、西廻廊と呼ばれている。東廻廊には神楽殿、西廻廊には額殿が接続している。内拝殿の東側には神饌所、西側には宝庫が建ち、本殿の周囲を透塀で囲み、北東、北西隅には東、西神庫が建てられており、東廻廊の東側には社務所、記念殿、会館が建ち並び、西廻廊の西側には時代祭の祭器具を収蔵する収蔵庫が建てられている。

平安神宮の創建は、明治28年（1895）に行われた平安遷都1100年記念祭の計画のなかで模造大極殿を建て、これを記念祭のモニュメントとしたことから始まる。当初の計画は、平安京創建時の朝堂院の復原であったが、敷地等の制約から規模を縮小し、大極殿、蒼龍楼、白虎楼とそれらを繋ぐ歩廊並びに応天門が建てられた。その後、大極殿北側に桓武天皇を奉斎する本殿を建て、大極殿を拝殿とすることとなった。

昭和15年（1940）には孝明天皇合祀に伴い、本殿の建て直しを主とした境内整備が行われ、今まで一棟だった本殿を東西に並べ、東本殿には桓武天皇、西本殿には孝明天皇が奉祀された。また、大極殿と本殿の間に新たに拝殿を建て内拝殿とし、大極殿は外拝殿と改められた。その他に東西神庫、透塀、宝庫、神饌所、神楽殿、額殿、東西廻廊、斎館、社務所、祭器庫等の建物が新築され、既存建物の修理、庭園の整備、表参道の拡幅等が行われ、現在の平安神宮の社頭が形成された。

その後、各建物は記念祭及び大祭で部分的な修理は行われてきたが、創建以来80年近く経過し、昭和50年（1975）の御鎮座80年祭を機に3年計画で本殿以下諸建物の修理事業が計画された。しかし、昭和51年（1976）1月6日の不慮の出火により、東西本殿、内拝殿、祝詞殿、東西翼舎、宝庫、神饌所の建物は全焼した。そのため、社殿修復事業は社殿復興事業に改められ、三間社の二棟の本殿は、合の間を入れて七間という一棟の本殿に変更し、また他の焼失した建物も新築し、既存建物は修理が行われた。特に御本殿が火災で焼失したということから防火対策が見直され、すべての建物に自動火災報知設備が設置された。昭和54年（1979）2月末に全ての工事が完成し、翌3月15日に本殿の遷座が行われた。

平安神宮の創建時に建てられた大極殿、蒼龍楼、白虎楼、東西歩廊、応天門は昭和58年（1983）6月1日に京都市指定文化財に指定され、昭和15年に建てられた大鳥居、神楽殿、

額殿、南歩廊等の建物は、平成14年（2002）8月21日に登録文化財に登録された。

2. 尚美館と泰平閣の修理

尚美館と泰平閣は東神苑内に位置し、尚美館は栖鳳池せいほう池の西岸に面して建ち、泰平閣は池の中央を東西にまたぎ、楼閣を中心にしてその両翼に翼楼を左右対称にして建っており、尚美館は貴賓殿、泰平閣は橋殿とも呼ばれている。これらの建物は、近年屋根の傷みが進み、雨漏りが各所でみられ、早急に修理を要する状態であった。そのため、桓武天皇1200年の記念事業の第一期事業として、平成12年度より4ヵ年事業で屋根の葺き替えを主とした修理工事を行った。



写真-1 尚美館 正側面

神苑の概要

神苑は、約3万平方メートルを有し、西神苑、中神苑、東神苑、南神苑の四つの庭で構成されている。それぞれの庭には、平安京大内裏の朝堂院四楼にちなんで、西神苑には白虎池、中神苑には蒼龍池、東神苑には栖鳳池が造られている。西神苑の白虎池には島がなく、花菖蒲が池畔を覆い、池の北には神苑唯一の滝がある。中神苑の蒼龍池には、池の中の東寄りに大島があり、島の北側に三条・五条大橋の石柱を利用した臥龍橋が架けられ、神苑の名所のひとつになっている。東神苑は壮大な栖鳳池中心とした庭園で、池の周囲に苑路を廻らせ、随所に枝垂れ桜を植え、池中に泰平閣、寝殿造りの釣殿風の尚美館が池の西岸に望んで建てられており、ここから東山の山々が眺められる。これらの建物は、栖鳳池と一体となって庭園景観を形成する一要素になっている。

各苑は有機的に連絡し、近代回遊式庭園として大規模なものであり、また建築物と庭園が良く調和し、近代庭園を代表するもののひとつになっている。

神苑の創建は、明治28年（1895）に模造大極殿が造営されるにあたり、社殿一帯の風致保存のために、周囲に庭園が計画されたことに始まる。その当時、本殿の東側に蒼龍池、西側に白虎池が設けられ、これを中心に庭園が造られた。この時、神苑の作庭には小川治兵衛があたり、その後昭和の初期までの約30年の間、常に彼の手法が受け継がれ、神苑の

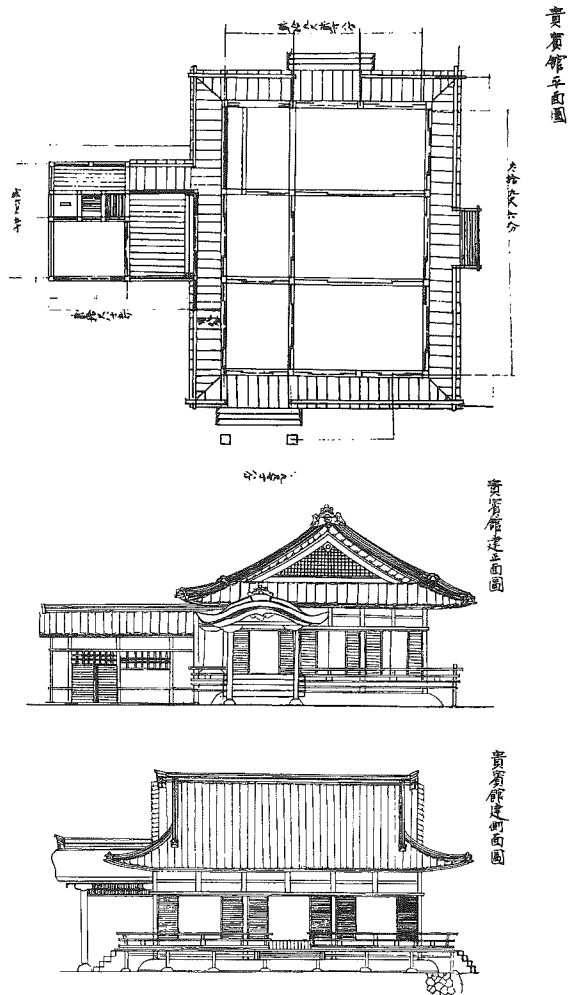


図-2 尚美館 平面図、正面図、東側面図 (大正3年)

尚美館の概要

尚美館は、明治13年(1880)に仙洞御所^{せんどう}の庭園内に旧京都博覧会の中堂として建てられていた正面六間、奥行き四間半の建物を大正2年(1913)に現在の場所に移築、改築したものである。安田時秀技師が改築設計を行い、貴賓館とされた。移築当初は棧瓦葺であったが、昭和15年(1940)、孝明天皇奉祀の記念事業で檜皮葺に改められ、東側面の縁の張り出しや西側下屋の改築が行われたと思われる。

また、昭和51年(1976)の檜皮の葺き替え時には、東面の軒の出を深くするため、一部を縄破風として屋根を葺き下ろす改修が行われている。

現在の建物は、入母屋造、南面西寄りに唐破風屋根の車寄せを付け、西面に片流れの下

築造や増改築が行われた。

明治の終わりから大正の初めにかけて、旧京都市美術館の敷地跡が平安神宮境内地に編入され、その場所に東神苑が造られることとなり。尚美館、泰平閣は、この時に移築及び新築された。

昭和43年(1968)、孝明天皇100年祭を記念して神苑西側の整備が行われ、南神苑を新たに築造する計画がたてられ、作庭には中根金作が担当し、工事は昭和44年(1969)11月20日に竣工した。南神苑は全体的に平安王朝風の優雅な風情をもつ曲水の庭が想定され、その後、南神苑は平安時代の草花が植えられ「平安の苑」として昭和56年(1981)に開園した。

神苑は昭和50年(1975)12月10日に国の名勝に指定されている。

屋を設けている。平面は、南を正面とし、正面西寄りに車寄せが付き、本屋は、正面から背面にかけて三間に間仕切り、東側に12帖間を三室並べ、西側の背面寄りに二間幅の床の間付きの4帖の上段の間を構え、その南側に二室の6帖間を配している。外周は、切目縁を廻らし、外廻りに高欄を付け、また、西面の縁外には、流し、広敷、便所等の付属施設を下屋としている。柱礎石、地覆石は、花崗岩の切石を据え、縁束石には花崗岩の自然石、切石が使われている。本屋の軸部は、礎石上に柱を建て、地覆、足固めを廻らし、内法貫、化粧貫を通し、外周は内法長押、内周は内法長押と天井長押を廻らし、柱頂部に舟肘木を置き、軒桁を載せている。車寄せの軸部は、礎石上に大面取りの柱を建て、頭貫を三方に通し、柱頂部に舟肘木を置き、正面には繫虹梁、側面には軒桁を載せている。正面の頭貫と繫虹梁間には暮股を置き、繫虹梁上に笈形付きの太瓶束を建て、大斗を置き、化粧棟木を受けている。本屋の軒廻りは、二軒疎垂木で、木負、茅負、布裏甲を載せ、化粧裏板を縦張りとしている。車寄せの軒廻りも同様で、桁内は茨垂木を架け、化粧小舞を置き、縦張りに化粧裏板を張っている。本屋の屋根は、檜皮葺き、裏板の一重軒付けで、棟は瓦積みで葺瓦、肌熨斗二段、熨斗瓦五段を積み、伏間瓦を置き、両端に鱗付きの獅子口を据えている。車寄せの屋根は、檜皮葺き、裏板の一重軒付けで、正面に唐破風を設け、棟は本屋と同じく瓦積みで正面に鱗付きの獅子口を据えている。

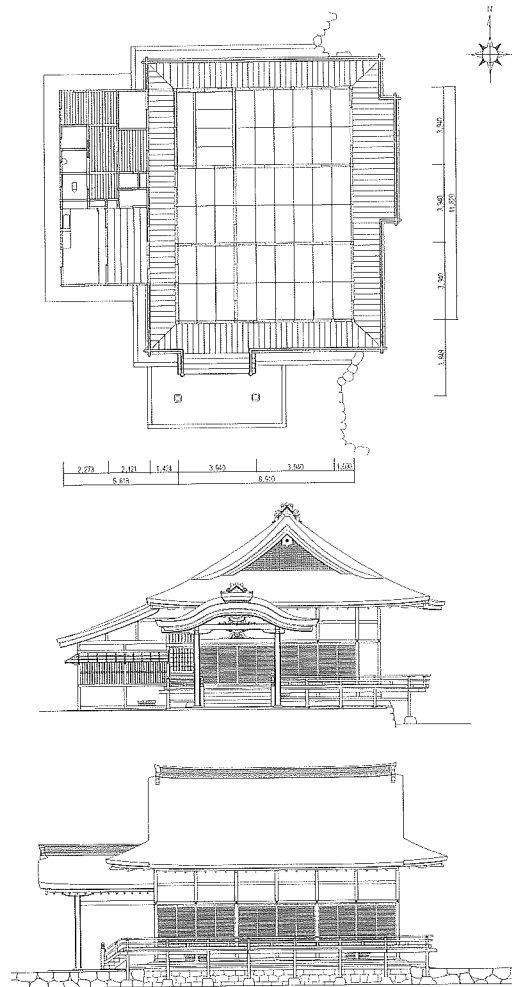


図-3 尚美館 平面図、正面図、東側面図

泰平閣の概要

泰平閣は、明治45年（1912）7月27日には池の上の架橋がほぼ完成していたが、その後の建築については詳細が明らかでなかった。今回の屋根葺替工事によって、楼閣上層屋根の露盤から銘文が発見され、大正元年（1912）12月1日に東神苑の修築が行われたことが判明した。また、設計は、工事監理に安田時秀の名前がみえることから、「社務日記」明治44年（1911）9月4日、5日の条の内容を裏付けるもので、尚美館の改築設計を担当した安田技師に間違いのないものと思われる。

建物は、中央に重層の楼閣を置き、東西に桁行五間、梁間一間の翼楼を設けており、南北の両側には、張り出しの高欄付腰掛が付いている。基礎は、池中に花崗岩切石の柱脚を建て、兩岸に花崗岩切石を積み、下桁を東西方向に架け渡している。軸部は、楼閣下層が下桁上に地覆を据え付け、柱を建て、外周に内法長押を廻し、柱頂部に片蓋式の舟肘木を付けて軒桁を載せており、楼閣上層は、外周に地長押、内法長押を付け、柱頂部に舟肘木を置き、軒桁を載せている。翼楼軸部は、楼閣下層同様に地覆を据え付け、桁行方向の柱通りに内法貫を通し、柱頂部に軒桁を載せ、梁間方向には、内法貫上に絵様肘木を内外に

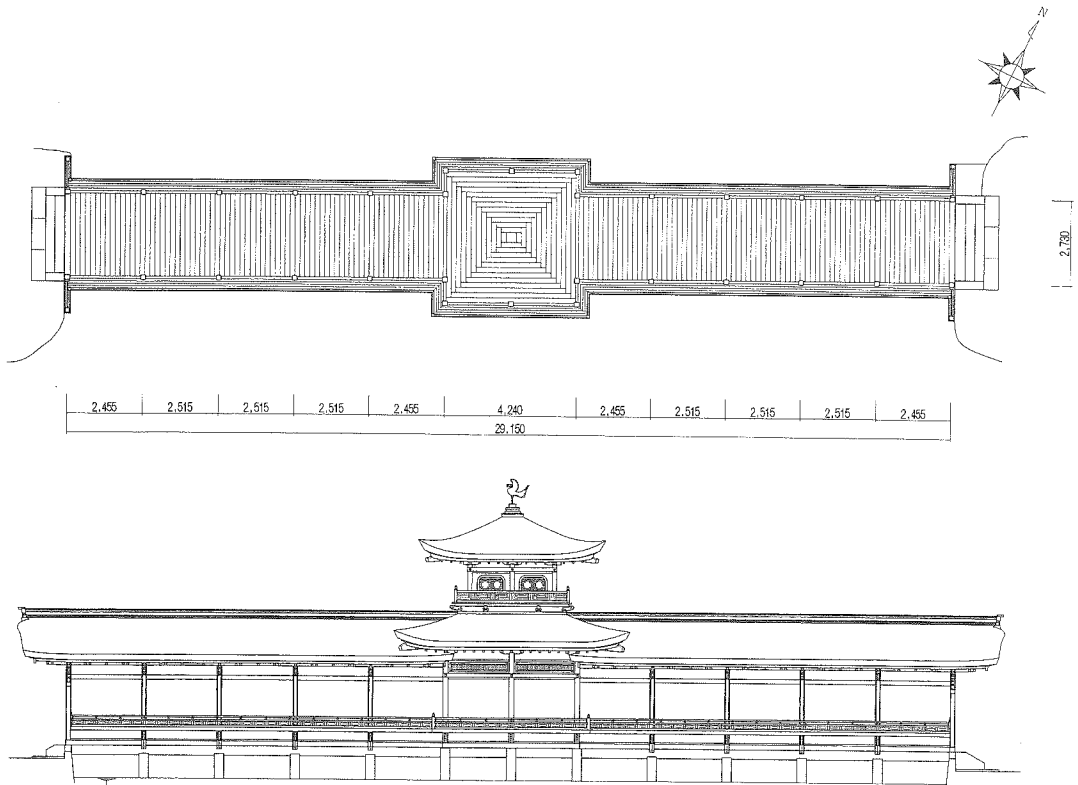


図-4 泰平閣 平面図、南立面図

設けて巻斗を置き、腕木を載せて外は軒桁、内は皿斗を置き虹梁を架け渡し、出桁を載せ、虹梁上の太瓶束、大斗で化粧棟木を受けている。軒廻りは、楼閣は下層、上層とも一軒疎垂木で、茅負、布裏甲を載せ、縦張りの化粧裏板を張っている。翼楼も一軒疎垂木で、広小舞、布裏甲を載せ、化粧小舞を置き、化粧裏板を縦張りとしている。屋根は、楼閣が檜皮葺、蛇腹板の一重軒付で、上層は露盤を置き、鳳凰を載っている。翼楼の屋根も檜皮葺、蛇腹板の一重軒付で、東西の両妻に唐破風を設けており、棟は瓦積みで、肌熨斗二段、菊丸一段、雨熨斗二段を積み雁振瓦を置き、両端に鱧付きの獅子口を据えている。

修理工事の概要

尚美館は昭和51年（1976）、泰平閣は昭和50年にそれぞれ屋根の檜皮の葺き替えが行われたが、平成9年（1997）10月の台風7号によって屋根の檜皮葺が被害を受け、応急的な修理が行われたものの、近年屋根の痛みが目立ち、雨漏りが随所に見られる等、早急に屋根の修理を行う必要があった。

そのため、尚美館と泰平閣は、桓武天皇1200年大祭記念事業の第一期事業の一事業として屋根の葺き替えを主とした部分修理工事が計画され、総事業費2億2,124万3,870円、国宝重要文化財等保存整備費補助金を受けて、事業期間が平成13年（2001）1月5日から平成16年（2004）3月31日までの39ヶ月間、工事期間が平成13年2月14日から平成16年2月20日までの36ヶ月間で実施された。

4ヵ年事業で行われた工事は、初年度の平成12年度には、泰平閣に素屋根を架設し、檜皮材料の調達を行い、平成13年度には、泰平閣の屋根の解体を行い、小屋組の補修、屋根の葺き替え、棟の瓦積みを行った後、素屋根を撤去し、尚美館の素屋根の架設に着手した。平成14年度には、前年度に引き続き尚美館の素屋根の架設、檜皮材料の調達、屋根の解体、小屋組の補修、屋根の葺き替えの一部を行い、その他には、既設ドレンチャー設備の撤去、庇の修理も実施した。平成15年度には、前年度に引き続き、尚美館の屋根の葺き替え、棟の瓦積み、避雷設備の据え付け直しを行ない、屋根工事が完了した後素屋根を撤去した。また消火設備は、地下式放水銃を新たに設置した。

尚美館の屋根は、軒付けの一部を残し、檜皮葺きを解体した後、野地面の腐朽箇所を取り替えを行ない、檜皮を葺き直した。屋根面に取り付けられていたドレンチャー設備は、昭和51年（1976）に設置されたものであったが、その周囲の檜皮が著しく損傷していたため、ヘッドや配管を撤去し、新たに放水銃二基を設置した。

泰平閣の屋根は、全面に痛みがひどく、軒先の一部が陥没するなど損傷が甚だしいため、全面的に檜皮の葺き直しを行った。

3. 大鳥居の修理

大鳥居は、応天門から南へ約300mの神宮道に位置する鉄筋コンクリート造一部鉄骨造鉄網モルタル塗の明神型の鳥居である。総高さ24.42m、柱間18.18mで、創建当時は全国最大規模を誇る大鳥居で、平安神宮の景観にはかかせない象徴的な役割をはたしてきた。

大鳥居の概要

大鳥居の柱は、円筒形中空鉄筋コンクリート造で柱脚元には花崗岩を張り、豆砂利洗い出しの犬走りを設け、周囲に花崗岩の縁石を廻らし、柱頂部に金箔押しの鍔金具を廻らしている。貫、額束、島木、笠木は等辺山形鋼をトラスに組み、その上に鉄網を張り、モルタルが塗られている。貫、島木、笠木の木口には金箔押しの鍔金物が付き、島木の両側面に菊の鍔金物が各三箇所取り付けられている。修理前の屋根には、波型スレートが葺かれていたが、記録や古写真によると貫等と同様に屋根下地の鉄骨に鉄網を張り、モルタルを塗り、石綿板が葺かれていたことが今回の工事中に判った。

平安神宮は、創建以来30年以上鳥居のない神社として経過してきたが、昭和3年(1928)に昭和天皇御大礼の記念事業として大鳥居の建設が計画され、平安神宮や時代祭を維持する京都市民が組織する平安講社によって建てられた。この工事の顧問には、京都帝国大学

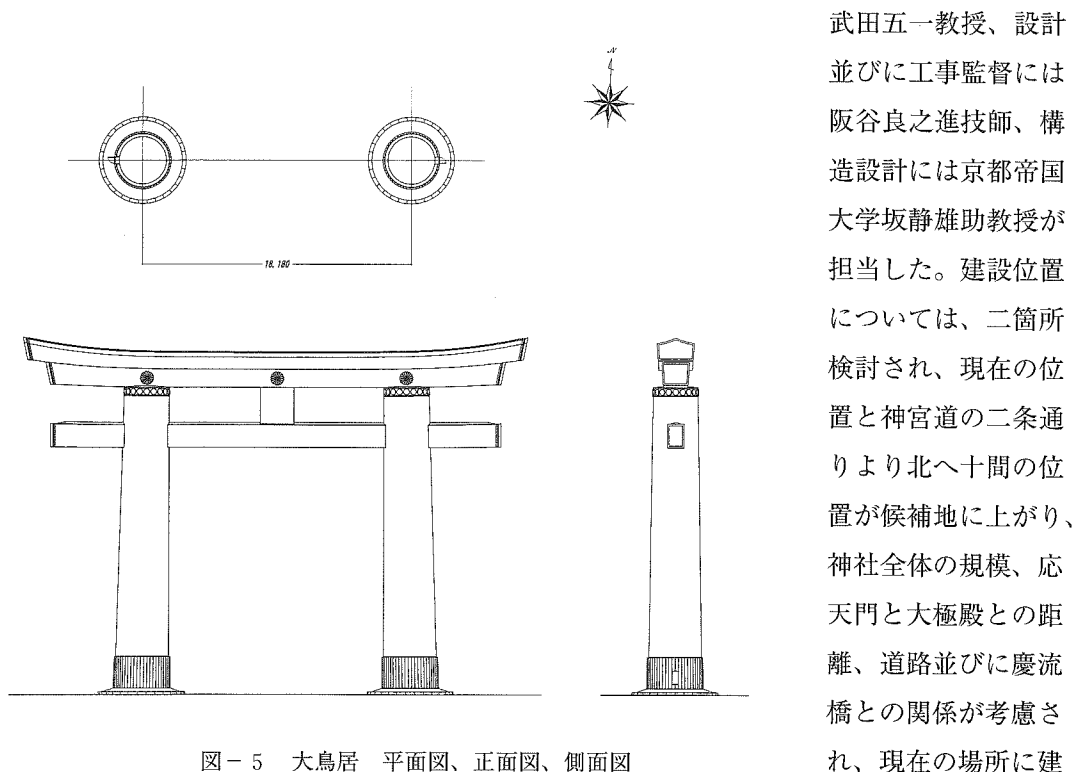


図-5 大鳥居 平面図、正面図、側面図

てられることになった。鳥居の様式規模については、当時の當山亮道宮司みずからが全国各地の100余りの鳥居を視察し、構造、高さ、幅等の調査を行い、衆議にはかった結果、明神型の鳥居に決定された。阪谷技師が基本設計を行い、約1/50の木製の模型が製作され、平安神宮関係者の意見をもとに実施設計が完成した。

鳥居の建立工事は、昭和3年（1928）6月1日から10月6日までに建築工事が行われ、その後約5ヵ月間にわたり表面のモルタル塗りの乾燥期間を置き、翌年3月に塗装工事が完了した。

その後、雨漏り、塗装の褪色が目立ち、昭和35年（1960）、孝明天皇御鎮座20年記念大祭の一事業として屋根改修と塗装の塗り替えを主とした修繕工事が行われた。翌年、9月の台風18号によって、前年の修理工事で新たに銅板葺きに葺き替えられた屋根が被害を受け、その時波型スレートに葺き替えられた。その後、昭和53年（1978）に塗装の塗り替え、モルタル塗りの補修、構造補強の修繕工事が実施された。この工事は当初、平安神宮御鎮座80年祭の記念事業の一部として昭和52年に実施される予定であったが、昭和51年（1976）1月の本殿等の建物が焼失したことから、この事業全体の見直しが図られ、1年遅れで実施された。



写真-2 大鳥居筈木屋根内部

しかしながら近年、鳥居表面に塗られている塗料の劣化が進み、モルタル塗りに亀裂が目立ってきたため、平成11年（1999）8月に現状調査が実施された。調査の結果、剥落したモルタル片が鳥居下を通る道路や歩道に落下する恐れがあることが判明、早急に修理を行う状況にあった。

修理工事の概要

大鳥居の修理工事は、桓武天皇1200年大祭記念事業の第二期事業の一事業として、塗装の塗り替えを主とした保存修理工事として計画され、総事業費8,568万円で、国宝重要文化財等保存整備費補助金を受け、事業期間が平成15年（2003）12月1日から平成16年

(2004) 3月31日までの16ヶ月、工事期間が平成16年5月24日から同年10月14日までの約5ヶ月で実施された。

修理工事では、鉄筋コンクリート造の柱の亀裂箇所にはエポキシ樹脂を注入し、フッ素樹脂塗装を行った。また、鉄骨造モルタル塗りの貫、額束、島木及び笠木は、表面の亀裂補修を行い、全面に炭素繊維シートを張り、その上にフッ素樹脂塗料を塗った。柱脚元の袴石は、割れや雨水の浸入により汚れが目立っていたために全て取り外し、清掃、補修及び一部取り替えを行った。取り付け方法は、在来に倣いモルタル詰めを行い、新たにステンレスの金物を用いた併用工法とした。笠木屋根は、昭和36年(1961)の台風の被害の後、応急的に葺かれた波型スレートを撤去し、硬質木片セメント板を張り、モルタル面と同様に炭素繊維シートを張り、フッ素樹脂塗料を塗った。木口等に取り付いている銕金物は、昭和35年(1960)の修理工事以来、44年ぶりに金箔を押し直し、表面保護のためにフッ素樹脂クリアを塗った。内部は、鉄骨の腐食が著しい箇所には補強の鉄骨を取り付け、鉄骨面全てに錆止め塗料を塗り、コンクリート、モルタル面には表面劣化防止剤を塗布した。また、今回の工事では、笠木上に避雷設備を新たに設置した。

あとがき

尚美館、泰平閣は約30年ぶりに檜皮葺の屋根が葺替えられ、東神苑の景観を構成する二つの建築物が整備された。また大鳥居は、炭素繊維シートによるモルタル面の補強を行うなど創建以来、初めてとなる大掛かりな修理工事で、鳥居全体にフッ素樹脂塗料が塗られ、鮮やかな朱色と銕金物の金色の輝きが甦った。

今回の修理工事により、これらが今後も京都市民のシンボルとして、また貴重な文化遺産としてあり続けることを期待してやまない。

終わりに、修理工事にあたり、工事関係者をはじめその他多大な協力をいただいた関係各位に対して心から感謝を申し上げます。

引用・参考文献 『平安神宮百年史』平安神宮(1998)

『平安神宮大鳥居造営史』平安講社本部(1929)

『名勝 平安神宮神苑記念物尚美館(貴賓殿)泰平閣(橋殿)保存修理工事報告書』

平安神宮(2004)

『国登録有形文化財(建造物) 平安神宮大鳥居保存修理工事報告書』平安神宮(2005)

写真協力 巻頭写真 株式会社 エスエス大阪